

## 富山大学和漢医薬学総合研究所研究集会報告書

|   |   |
|---|---|
| 研究集会<br>タイトル  | 生体機能と創薬シンポジウム 2011（主催：日本薬学会薬理系薬学部会）<br>Symposium on Biofunction and Drug Discovery  |
| 主催者   | 公益社団法人 日本薬学会薬理系薬学部会   |
| 日 時   | 平成 23 年 9 月 1 日～9 月 2 日   |
| 場 所   | 日本薬学会長井記念ホール  |
| 担当者と<br>連絡先   | 実行委員長：岡 淳一郎<br>TEL：04-7211-3610 E-mail：okaji@rs.noda.tus.ac.jp  |
|   | 研究所：松本欣三<br>TEL：076-434-7610 E-mail：mkinzo@inm.u-toyama.ac.jp   |
| 関連分野<br><small>（該当項目に○をつけてください、複数可）</small>           | 1. 資源科学<br>②病態制御<br>3. 臨床利用<br>4. その他（ ）  |
| 目的と<br>研究集会の<br>概略                                    | <p>「生体機能と創薬シンポジウム」では、従来から生体機能の研究が創薬の基礎研究として、逆に創薬研究が新たな生体機能を解明するツールを提供することで、両者が補完しながら進歩を遂げてきていることを明らかにしてきた。また、基礎研究の重要性を踏まえながら臨床での応用を期待し、臨床の結果を基礎研究に当てはめて創薬に関する情報を発信しており、薬理系薬学領域の研究の発展に大きな貢献を果たしてきた。「生体機能と創薬シンポジウム 2011」においても、このことを継承しつつ中枢疾患・循環系疾患・消化管疾患及び呼吸器疾患について基礎研究から臨床研究までを視野に入れ、薬理学の発展に寄与できる情報を形成し発信できるシンポジウムとしたい。特にシンポジウム 2)「認知症の予防・治療に挑む和漢薬—その研究最前線」を企画し、和漢薬を用いた認知症の予防・治療に関する最近の研究成果を薬学会会員や企業からの参加者に広く紹介することを目的とした。これによって、和漢薬の有用性や課題に関しての科学的情報の提供を通して、和漢薬研究の意義と重要性に議論を深めることを企図した。</p>   |
| 和漢医薬学の<br>科学的基盤形<br>成および関連<br>研究者コミュ<br>ニティ形成へ<br>の貢献 | <p>本シンポジウムは、生体機能に関し薬理学的手法を駆使して明らかにし、そこで明らかにされた生体機能を踏まえて、より有効で安全な薬を創製していく方法論や研究戦略について議論する場として企画されたものである。</p> <p>この開催主旨のもと、我が国の医療の重要な一端を担っている和漢薬についても生体機能と創薬的観点から、シンポジウム「認知症の予防・治療に挑む和漢薬：その研究最前線」が企画された。未だ適切な治療薬のない認知症を生体（脳）機能の異常として捉え、有効な和漢薬や和漢薬成分の薬理作用や作用機序についての最新の研究成果の発表と議論がなされたことは、和漢薬を研究対象としない薬系研究者や薬系企業関係者における「和漢薬研究」の意義と役割に関する認識を新たにするきっかけとなり、更なる理解の向上にも繋がったものと考えられる。</p> <p>本シンポジウムの開催母体が日本薬学会薬理系薬学部会であり、参加者の半数近く薬学系学生・大学院生であったことは、和漢医薬学に関する新たな関心と興味を引きつける要因ともなり、特に「認知症という重要疾患の予防や治療に向けた和漢薬研究」の現状と将来に関する討論を実地見聞できたことは、和漢医薬学研究領域における人材導入や人材育成にも繋がりを、ひいては「和漢医薬学領域の研究者コミュニティ」の形成にも結びついていくと確信する。</p> |

|       |   |
|-------|---|
| プログラム | <p>9月1日(木) 9:25～19:30<br/> 9:25-9:30 開会挨拶 実行委員長・岡 淳一郎<br/> 9:30-11:30 S1(シンポジウム1)<br/> 「炎症性呼吸器疾患の新たな治療オプションを考える」<br/> オーガナイザー・金子 次男 (第一三共株式会社循環代謝研究所)<br/> 磯濱 洋一郎 (熊本大学大学院生命科学研究部・薬物活性学分野)</p> <p>S1-1. スタチンの気道炎症抑制作用：動物モデルでの検討<br/> ○土肥 眞 (東京大学大学院医学系研究科・アレルギーリウマチ内科)</p> <p>S1-2. ステロイド抵抗性の気道炎症と Toll-like receptor 3 signaling<br/> ○木澤 靖夫 (日本大学薬学部・機能形態学)</p> <p>S1-3. マクロライドの新作用としての気道炎症抑制作用<br/> ○佐藤 圭創、新屋 智寛 (九州保健福祉大学薬学部・生化学1)</p> <p>S1-4. ダニ抗原誘発による喘息様病態の解析から見えてきた創薬ターゲット<br/> ○田中 宏幸 (岐阜薬科大学・薬理学、岐阜大学大学院連合創薬)</p> <p>S1-5. PDE 阻害薬 ibudilast による気道粘液産生抑制作用<br/> ○磯濱 洋一郎 (熊本大学大学院生命科学研究部・薬物活性学分野)</p> <p>11:30-13:00 昼食</p> <p>13:00-14:00 L(特別講演) 座長・岡 淳一郎 (東京理科大学薬学部・薬理学)<br/> 血液疾患－治療の最前線－<br/> 岡本 真一郎 (慶應義塾大学医学部・血液内科)</p> <p>14:00-14:15 休憩</p> <p>14:15-15:00 N(新任研究室紹介) 座長・岡 淳一郎 (東京理科大学薬学部・薬理学)<br/> N-1. 田辺 光男 (北里大学薬学部・薬理学)<br/> N-2. 橋本 均 (大阪大学大学院薬学研究科・神経薬理学)<br/> N-3. 前田 武彦 (新潟薬科大学薬学部・薬効薬理学)</p> <p>15:00-15:15 休憩</p> <p>15:15-17:15 S2 (シンポジウム2)<br/> 「認知症の予防・治療に挑む和漢薬－その研究最前線」<br/> オーガナイザー・松本 欣三 (富山大学和漢薬研究所・複合薬物薬理)<br/> 山國 徹 (東北大学大学院薬学研究科・薬物療法学)</p> <p>S2-1. アルツハイマー病根本治療薬の開発と予防医学<br/> ○荒井 啓行 (東北大学加齢医学研究所)</p> <p>S2-2. アルツハイマー病動物モデルを用いた抑肝散の認知症周辺症状ならびに<br/> 中核症状に対する作用について<br/> ○岩崎 克典 1、2)、高崎浩太郎 1)、野上 愛 1、2)、阪田 有理 1)、<br/> 窪田 香織 1)、桂林秀太郎 1)、三島 健一 1、2)、藤原 道弘 1)<br/> (1) 福岡大学薬学部・臨床疾患薬理学、2) 福岡大学加齢脳科学研究科)</p> <p>S2-3. 生活習慣・加齢からくる認知症と和漢薬<br/> ○松本 欣三 1)、趙 琦 1)、常山 幸一 2)、宮田 健 1、3)<br/> (1) 富山大学・和漢医薬学総合研究所、2) 富山大学大学院医学薬学研究<br/> 部(医学)、3) 崇城大学薬学部・未病薬学)</p> <p>S2-4. ノビレチンの抗アルツハイマー病活性を薬効基盤とする漢方薬・陳皮に<br/> よる認知症克服へのアプローチ<br/> ○山國 徹 (東北大学大学院薬学研究科・薬物療法学)</p> <p>17:30-19:30 懇親会 (長井記念館ロビー)</p> |
|       | <p>9月2日(金) 9:30～17:35<br/> 9:30-11:30 S3(シンポジウム3)<br/> 「心臓が出来てから老化して病気になるまで」<br/> オーガナイザー・田中 光 (東邦大学薬学部・薬物学)<br/> 黒川 洵子 (東京医科歯科大学難治疾患研究所・生体情報薬理分野)</p>  |

|       |  |
|-------|--|
| プログラム | <p>S3-1. 心臓が動くまで—培養系での心筋再生を中心に—<br/>○小野 景義 1)、鈴木 重人 1)、上園 崇 1)、栗原 順一 1)、下山 多映 2)、大塚 文徳 2)、木内 茂樹 1)<br/>(1) 帝京大学薬学部・薬理学、2) 環境衛生学)</p> <p>S3-2. こどもの心臓からおとなの心臓へ—心筋興奮収縮機構の発達変化—<br/>○田中 光、濱口 正悟、川上 悠子、本多 頼子、行方 衣由紀 (東邦大学薬学部・薬物学)</p> <p>S3-3. 男の心臓、女の心臓—性ホルモンと不整脈—<br/>○黒川 洵子、古川 哲史 (東京医科歯科大学難治疾患研究所・生体情報薬理)</p> <p>S3-4. くたびれた心臓—心筋梗塞後不全心での<math>\alpha</math> B クリスタリンの変化—<br/>○田野中 浩一 1)、丸ノ内 徹郎 1)、阿部 洋平 1)、猪俣 聡美 1)、高木 教夫 1)、三部 篤 2)<br/>(1) 東京薬科大学薬学部・分子細胞病態薬理、2) 岩手医科大学薬学部・薬剤治療)</p> <p>11:30-13:00 昼食</p> <p>13:00-14:15 F1(フリーセッション1)<br/>座長・栗原 順一 (帝京大学薬学部・薬理学)</p> <p>F1-1. 細胞質型ホスホリパーゼ A2 <math>\alpha</math> 阻害作用を持つ C1P 誘導体の探索研究<br/>○牧山 智彦 1)、中村 浩之 1)、西田 篤司 2)、村山 俊彦 1)<br/>(1) 千葉大院・薬・薬効薬理、2) 千葉大院・薬・薬品合成化学)</p> <p>F1-2. 骨細胞由来因子 Growth differentiation factor 15 による骨代謝調節<br/>○檜井 栄一、宝田 剛志、米田 幸雄 (金沢大院・薬・薬物学)</p> <p>F1-3. ブロココリースプラウト及びバナナの抗花粉症効果の解析<br/>○福本 敦、入江 雅彦、福島 知里、野池 芽衣、谷中 昭典 (東京理大・薬・臨床薬理)</p> <p>F1-4. 心筋梗塞感受性分子 BRAP の機能解析と新規結合分子の同定<br/>○尾崎 浩一、田中 敏博 (理化学研究所・ゲノム医科学研究センター・循環器疾患研究チーム)</p> <p>F1-5. Efonidipine 光学異性体を用いた洞房結節緩徐脱分極に關与する Ca<sup>2+</sup> チャネル分子種 (Cav1.2、Cav1.3、Cav3.1) の薬理的検討<br/>○行方 衣由紀 1)、恒岡 弥生 1)、小川 亨 1)、中瀬古 寛子 2)、赤羽 悟美 2)、田中 光 1)<br/>(1) 東邦大・薬・薬物、2) 東邦大・医・薬理)</p> <p>14:15-15:15 F2(フリーセッション2)<br/>座長・鈴木 岳之 (慶應義塾大学薬学部・基礎生物学)</p> <p>F2-1. BDNF 視床下部内局所投与による脳虚血後の糖代謝制御を介した神経保護作用<br/>○原田 慎一、藤田 和歌子、徳山 尚吾 (神戸学院大学・薬・臨床薬学)</p> <p>F2-2. グリシンベタインによる学習・記憶障害改善作用機序の解明<br/>○平松 正行 1、2)、木下 沙織 2)、木戸 究 2)、中島 菜月 2)、坪井 純子 2)、三輪 将也 1)、鍋島 俊隆 2)<br/>(1) 名城大学・院・総合学術、2) 名城大・薬・薬品作用学)</p> <p>F2-3. ドパミンニューロンによる線条体神経支配の in vitro 再構築とその機序解明<br/>○泉 安彦、脇田 誓子、久米 利明、赤池 昭紀 (京都大学・薬・薬品作用解析)</p> <p>F2-4. 扁桃体のニューロン集団による恐怖記憶の符号化様式<br/>○野村 洋 1)、野中 綾子 1)、豊田 雄 1)、江口 恵 2)、山口 瞬 2)、松木 則夫 1)<br/>(1) 東京大学・薬・薬品作用学、2) 神戸大学・医・神経発生学)</p> |
|-------|--|

|             |  |
|-------------|--|
| プログラム       | <p>15：15-15：30 休憩</p> <p>15：30-17：30 S4( シンポジウム4)「消化管疾患の病態生理と治療薬の開発」<br/> オーガナイザー・竹内 孝治（京都薬科大学・薬物治療学）<br/> 谷中 昭典（東京理科大学薬学部・臨床薬理学）</p> <p>S4-1. 消化管炎症におけるセロトニンの役割<br/> ○加藤 伸一、安田 仁、天ヶ瀬 紀久子、竹内 孝治（京都薬科大学・病態薬科・薬物治療学）</p> <p>S4-2. 硫化水素と内臓痛<br/> ○川畑 篤史（近畿大学薬学部・病態薬理学）</p> <p>S4-3. 胃リンパ腫をターゲットにした各種モノクローナル抗体による抗腫瘍効果について<br/> ○中村 正彦、土本 寛二（北里大学薬学部・病態解析学）</p> <p>S4-4. NSAID 潰瘍の発症機構、HSP 誘導薬の効果、副作用の少ない NSAID の開発<br/> ○水島 徹（慶應大学薬学部・分析科学講座）</p> <p>17：30-17：35 閉会挨拶 実行委員長・岡 淳一郎</p> |
| 参加者数        | <p>研究所： 1名（うち、学生 0名）</p> <p>他部局： 0名（うち、学生 0名）</p> <p>学外： 117名（うち、学生46名、企業関係 11名）</p>   |
| その他<br>特記事項 |  |